

訪問援助の過程に関する研究

大塚千春

筆者の行った2事例の家庭訪問援助をもとに、把握した情報、援助行為とその意図より、その過程の特徴を検討した。把握した情報は、事実や現状のみでなく対象の気持ちや考えを含み、また対象の家族や対象にかかわる他職種の考え・判断におよんでいた。

また援助行為の意図は11に分類された。「事実や現状を聞き対象の状況を理解する」意図を持ち対象とかかわりながら援助を行い、その結果「対象自身の考えや希望、意思を明確にさせる」意図を持ったかかわりへと援助が進展していた。さらに、対象自身が選択した生活や決定したことを支援するため、対象の今後の「希望や意思を確かめる」、「対象自身が問題解決のために他者へ働きかけることを促す」という意図で援助を行っていた。援助の過程は、対象自らが意思決定をし、療養生活を整えていくことを支える過程であった。

キーワード：家庭訪問援助、援助の過程、援助行為の意図

目 的

看護職が対象の家庭を訪問し看護を提供する機会は増加している。家庭では、対象を理解していくことと並行して援助を行い、援助の到達目標を見いだしていくことが重要となる。そして、対象自身による問題解決を促すとともに家族によるケアを充実させ、一方ではそのケアを支援できる人を幅広く集め、対象とその家族の社会生活を可能な限り豊かなものとしていくことを目指している¹⁾。看護職は、そのために対象とかかわりながら徐々に対象を理解し援助を導いているが、その過程が質の高い看護を提供する上で重要だと考えた。そこで本研究は、在宅で療養している人への家庭訪問の経過を、看護職の行為の意図に焦点をあて分析することで、援助の過程の特徴を明らかにすることを目的とした。

方 法

1) 対 象

保健婦の受け持ち事例のうち、筆者の訪問の了解を得られた2事例を対象とし、筆者が家庭訪問援助を実施した。2事例の概要は表1に示した。調査期間はH.9年の6月～9月までで、2事例とも6回の家庭訪問を行った。

2) 分析方法

筆者が援助の必要があるのではないかと意識した事例のうち、それ以降に関わりの経過があり分析が可能なものに関し、対象との会話を訪問の経過に沿って取り出した。筆者が対象の言動で、意味のある情報のまとまりとして認識したものを一つの情報の単位とし、その情報の内容を記述した。その情報の内容と、援助の経過における筆者の行為を経過に沿って整理した。さらに筆者の行

為について、その行為の意図を一つの行為につき一つ記述し、分類した。そして、援助の進展の経過について筆者の把握した情報の内容、筆者の援助行為、筆者から対象へ働きかけた意図からその特徴を検討した。

結 果

1. 援助の必要性を意識した事柄

事例Aでは、受診に関すること、外出や患者同士の交流など社会生活に関すること、食生活や家事など療養生活に関すること、酸素吸入に関すること、胃炎の治療に関すること、身体障害者手帳の申請に関すること、電動ベットの購入に関することの7つの事柄が取り出された。事例Bでは、医療機関とのつながりに関すること、福祉施設の利用に関すること、夫の介護生活を支える人々の活用に関することの3つの事柄が取り出された。

2. 援助の過程における情報収集

援助の過程では、援助の必要性を意識する事柄を、対象と接する中でまず捉えていた。その援助が必要なのではないかと意識するきっかけとなる情報は、対象の気持ちや希望であったり、看護職として気になる事実や現状であった。そして援助が必要だと意識してから看護職は様々な意図をもって対象への働きかけを行い、援助の方向性を探っていた。

1) 把握した情報

対象を援助する過程で捉えていたことを分類した結果、今対象がどのような状況であるかという「事実や現状」、対象の心境である「対象の気持ち」、「対象の考え」、明確にこうしたい、あるいはこうして欲しいという「対象の希望」、対象自身がこれからこういう行動をとろうという「対象の意思」、「対象が現在の考えや希望、行動に至った理由」、「家族の考え」、「対象にかかわる他職種の判断・考え」の8つに分類された(表2)。事実や現状には、対象の家族の状況や近隣との交流など、対象にかかわる様々な人の情報が含まれていた。

表1 事例の概要

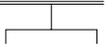
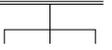
	事 例 A	事 例 B
氏 名	N・T	K・M
年齢, 性別	74歳 男性	75歳 女性
疾 患	肺気腫 慢性胃炎 高血圧	パーキンソン病 痴呆
現 病 歴	H .3 肺気腫と診断 H .6 ~在宅酸素療法を開始	S 63頃より歩行困難 H .3頃 K病院受診し, パーキンソン病と診断される
家族構成	 同居:長男 S44年生 鉄工所勤務 精神薄弱 別居家族:長女 H9年4月結婚し東京に居住	 同居:夫 T9年生 主に介護を担っている 別居家族: 長男の妻が月2回程度訪問
身体的状態	階段を昇るなど, 動いたときに息苦しさあり。 身体状態は安定している。	歩行は要介助 排泄はトイレ歩行とオムツを併用
医 療 面 (受診) (治療)	I内科 1回/2週 長女が車で送迎し受診 0.5L/min, 24Hrで酸素吸入 内服治療	K病院 1回/月 夫と, 長男の妻が県内より来て付き添う。 タクシーにて受診 内服治療
日 常 生 活	日常生活動作は自立	日中は座椅子に座りテレビを見て過ごす
保 健 婦 の 把 握 方 法	K町の社会福祉協議会に, 通院介助サービス利用の希望 があったため, 保健婦に連絡があり把握。 社会福祉協議会の職員と同行訪問。(H9.5.1)	特定疾患介護手当状況調査書作成のため訪問 (H.8.11.11)
福 祉 の 利 用 状 況		ホームヘルパー 1回/週 2時間 入浴サービス 福祉施設の利用を申請中

表2 把握した情報とその件数

情 報 の 内 容	事例A	事例B
事実や現状	59	22
対象の気持ち	18	10
対象の考え	26	19
対象の希望	9	12
対象の意思	15	4
対象が現在の考えや希望, 行動に至った理由	3	5
家族の考え	1	1
対象に関わる他職種の判断・考え	7	1
合 計	138	74

数字は件数を示す

表3 援助行為とその件数

援 助 行 為	事例A	事例B
対象に問いかける	42	29
情報を提供する	7	2
他職種の考えを伝える	2	1
具体的な提案をする	7	3
医学的な知識を伝える	9	0
看護職の判断・考えを伝える	3	5
看護職, 他職種, 福祉施設の役割について説明する	1	8
援助者側の気持ちを伝える	0	1
看護職が今後実施しようとする行為を対象に伝える	3	4
合 計	74	53

数字は件数を示す

2) 援助行為とその意図

援助行為は「対象に問いかける」, 「情報を提供する」, 「他職種の考えを伝える」, 「具体的な提案をする」, 「医学的な知識を伝える」, 「看護職の判断・考えを伝える」, 「看護職, 他職種, 福祉施設の役割について説明する」, 「援助者側の気持ちを伝える」, 「看護職が今後実施しようとする行為を対象に伝える」の9つに分類された(表3)。さらに, 対象への援助行為についてその意図を抽出すると「事実や現状を聞き, 対象の状況を理解する」, 「看護職の予測したことが対象の考え等に一致しているのか確かめる」, 「対象自身の考えや希望, 意思を明確にさせる」, 「対象の希望を支えるために事実や気持ち, 希望, 意思を確かめる」, 「対象自身が自分の健康を守るために適切な判断・行動をすることを助ける」, 「対象自身が問題解決のために他者へ働きかけることを促す」, 「対象が自分のおかれている状況を的確に認識することを助ける」, 「看護職, 他職種, 福祉施設の有効な活用を促す」, 「家族による協力の可能性を判断する」, 「対象に看護職の責任を示し, 援助への同意を得る」, 「対象の経済的な利益を守る」という11に分類された(表4)。

3. 援助過程での援助の意図の変化

事例Aでは, 援助の初期に対象が受診について社会福祉協議会の主催する通院介助サービスを利用したいという希望があったが, 在宅酸素療法を施行しているため家族に付き添って欲しいと社会福祉協議会より話され, 利用していないという現状を捉えた。訪問1回目, 2回目に受診の継続状況や今後の受診方法についての本人の考え, 「できれば家族に負担をかけずに1人で受診した

表4 援助行為の意図とその件数

援助行為の意図	事例A	事例B
事実や現状を聞き、対象の状況を理解する	21	8
看護職の予測したことが対象の考え等に一致しているか確かめる	3	10
対象自身の考えや希望、意思を明確にさせる	12	9
対象の希望を支えるために事実や気持ち、希望、意思を確かめる	4	4
対象自身が自分の健康を守るために適切な判断・行動をすることを助ける	12	1
対象自身が問題解決のために他者へ働きかけることを促す	4	1
対象が自分のおかれている状況を的確に認識することを助ける	2	2
看護職、他職種、福祉施設の有効な活用を促す	5	17
家族による協力の可能性を判断する	6	5
対象に看護職の責任を示し、援助への同意を得る	3	4
対象の経済的な利益を守る	2	0
合計	74	53

数字は件数を示す

い」という本人の気持ち、家族の現状を捉えつつ、**対象のおかれている状況を援助者として理解**していった。そして訪問3回目に対象の通院介助サービス利用についての**希望を明確にするという意図**をもち、対象の希望を確認し、できれば通院介助サービスを利用したいという**対象の希望を支える**ために本人の受診時の状態、主治医の判断等の事実、現状を把握しながら、対象の同意を得ながら社会福祉協議会へ働きかけた。その結果通院介助サービスが利用できることとなり、訪問6回目に筆者は**通院介助サービスを有効に活用できるように**通院介助サービス利用の仕方について説明をした。そこで対象は初めて緊急時に利用したいという本当の希望を述べ、緊急時の受診方法という新たな問題に対応する必要があることを筆者は意識した。はじめにあった定期の受診方法については、対象が望むときに通院介助サービスへ対象自身が連絡をするという対象の意思が話されたため、同意した。また緊急時の受診については、対象は救急車は呼びたくないという気持ちを持っていたが、対象の考える緊急時とはどのような状態か、**家族や近所の協力は得られるかという可能性を看護職が把握しながら、対象が自分自身の健康を守るために適切な判断・行動をする事を助けるという意図**を持ち救急車を利用することを提案し、対象も救急車を呼ぶことにするという意思を話した。

事例Bでは、夫は妻の介護に疲れ、できれば長期で施設にあずけたいということを担当保健婦に話していること、福祉施設が利用できるよう保健婦が援助し、福祉に申請中であるという対象の考えや現状を把握し、訪問をした。妻の福祉施設への長期入所が夫の本当に望むことなのか、本当に長期入所が必要な状況なのかという**対象の状況を理解する**という意図で、訪問1回目に夫の介護の状況を確かめていた。しかし、その介護状況を確かめ

ている時に夫から今後の医療に対する夫の懸念、入所ではなく妻が長期で入院できる病院を教えて欲しいという希望を話された。筆者は対象の現状を知り、やはり外部支援が必要であるという判断をし、一つは**福祉施設を有効に活用できるようにという意図**で、訪問2回目以降にショートステイやデイサービスについて夫に情報を提供し利用することを提案した。また、**ホームヘルパーや家族の協力に対する希望を明らかにしていく**ことを行った。訪問1回目に新たな問題として医療について対応する必要があると意識し、主治医の対応、通院に関する困難、妻の身体的状態などの**事実や現状を聞き状況を判断**した。それから対象自身に「やはり入所ではなく入院させたい。できる限り自分で看られるうちは自分で見て、看られなくなったら福祉施設へ長期であずけたい。それよりも今は入院先を確保したい」という**夫の考え、希望を明確にさせていった**。そして訪問2回目に**夫の希望を支える意図**で往診医と緊急時の入院先の確保について夫の希望を確認し、同意を得ながら往診医と入院先を探した。

その結果往診医は1回往診をしたが、今後は訪問看護婦を派遣しその連絡を受け往診するという考えであり、そのことを夫が往診医に聞くことができていなかったため筆者が往診医の考えを伝えた。訪問5回目に**夫の希望を支える**ために筆者が往診についての希望を確認したところ、「訪問看護婦は必要ない。往診医に定期的に往診して欲しい。」という希望があり往診医へ夫の考え、希望を伝えるということを行っていた。また一方で筆者は訪問看護婦も外部支援として対象を支えていくことも意義があると判断し、**夫が訪問看護婦を有効に活用できるようにという意図**で訪問看護婦についての役割や、訪問看護婦に可能な仕事内容を夫に伝えていた。

以上より、看護職はまず援助が必要なのではないかと意識したことについて事実や現状を対象から聞き、状況を理解するという意図を持ってかわりつつ事実や現状を対象とともに整理していた。その後対象自身に考えや希望、意思を明確にさせる意図を持った働きかけをするようになっていた。そして対象の立場に立ち対象の希望を支えるためにさらに事実や気持ちや考え、希望を確かめながら援助の方向性を対象と共有していた。その過程において対象自身が十分に考慮した上で意思決定することができるよう、対象自身が自分の健康を守るために適切な判断・行動をすること助けるという意図を持ち、看護職の知識や情報、考え・判断を伝えるということがあった。あるいは外部支援が必要であるという判断を看護職がしていればその外部支援の役割を説明し、有効に活用することを促すという意図を持った働きかけを行っていた。そして対象の希望が明確になれば、それを実現するために対象自身が他者に働きかけたり、看護職が対象の同意を得ながら対象と他者をつなぐ役目を行い、対象の決定したことについて援助を実施していた。

援助の過程において一つの事柄に取り組んだ結果、新しく対応する必要のある事柄が明確になり、さらに事実や現状を確かめながらその事柄に関する対象の考えや希

望, 意思を明確にしていく過程を繰り返していた。

・考 察

家庭訪問における看護職の援助を, 把握していた情報, 行為および意図の特徴を検討し, 看護としての意味を考察する。

1. 援助過程において把握した情報

看護職は, 対象の事実や現状のみでなく, 対象の気持ちや考えを繰り返し確認し, その気持ちや考えに沿ってさらに事実や現状捉えていくということを繰り返していた。そして繰り返すことで対象の本当の希望や, 対象自身がその問題に対してどういう行動をとるという意思を捉えることへ至っていた。看護職は対象の状況や希望を理解するにつれ, 問題に対してどのようになったらよいのかというイメージを念頭に置きながら対象に働きかけることにより, 対象のその問題に対する希望や意思を把握できると考えられる。

また, 把握する内容は対象自身以外に, 家族の状況や考え, 他職種の判断や考え, 仕事内容, 近隣との交流といった対象にかかわる様々な人々の情報を含んでいた。地域では, 対象は様々な人との関係を持ちながら生活をしており, それら対象の背景を考慮して援助を実施していくことが不可欠である。その場合対象の家族や近隣の人々を対象の支援者として捉えると同時に, その人々自身は対象の受診等の支援をするなど役割を担っていることにより生活や仕事に影響を受けており, 看護の必要な対象として捉える必要がある。そのことにより, 対象の今後の状況が予測され, 対象を取り巻く状況を整えておくことが可能となる。

2. 援助の進展

看護職は, 看護をするという目的を持ち対象とかかわり, その時々で意図を持った情報収集をしている。かわりの初期は対象のありのままの気持ちや希望を捉え, また事実や現状を整理している。その後, 対象自身に考えや希望を明らかにさせ看護職の援助の方向性を共有し

ていることが明らかになった。それは, 対象の主体性を尊重したかわりであり, 対象自身が抱えている問題に気づき, 自らが自分の望む生活を整え健康を守っていくことを助けるということである。これは対象のセルフケア能力を向上させるという看護の原則²⁾に沿ったものだと言える。

そして, 対象が考えや希望を明らかにしていく段階で「対象自身が自分の健康を守るために適切な判断・行動をすることを助ける」あるいは「看護職, 他職種, 福祉施設の有効な活用を促す」, 「家族による協力の可能性を判断する」といった意図をもって知識や情報を提供したり, 情報を得ていた。この時点では, それまでの得ていた情報から看護職として対象の望ましい状態がイメージされ, それに沿って行動していると考えられる。そのイメージは対象と充分コミュニケーションをとり様々な背景を含めた情報を得ることで明確になり, また対象に看護職の予測したことを表現し確かめていくことにより対象と一致したものとなってくるため, 対象と共に考え, 本当に対象の望んでいる生活がどのようなものであるかを, 看護職が深く理解していこうとする姿勢が重要である。最終的に意思決定をするのは対象であり, その知識や情報を伝えた後対象がどのような選択をするのか表現することを助け, 対象の希望や意思を確認していた。

対象自身が選択したことに関しては, 必要ならば「対象自身が問題解決のために他者へ働きかけることを促す」あるいは「対象に看護職の責任を示し, 援助への同意を得」ながら他者へ看護職が働きかけるなど行っていた。これは, 対象自らが主体となって本当に望んでいることにむけて具体的に行動するということであり, 看護職もそのための手段として役割を果たしていると考えられる。

- 1) 平山朝子, 宮地文子(1990)公衆衛生看護学総論 1, 第1版. 日本看護協会出版会, 260-269.
- 2) 井上幸子, 平山朝子, 金子道子編(1995)看護とは [1] 看護の概念と看護の歴史, 第2版. 日本看護協会出版会, 27.

Abstract**A Study of the Process of Home Health Nursing****Chiharu OHTSUKA**

The purpose of this study was to clarify the nature of the process of home health nursing by focusing on gained information, nurse's activities and its intentions. The author visited 2 cases, 6 times each.

The nurse gained information not only about the clients' situations but also their feelings, thoughts, wishes and mind. Further, information including about their family and participants in their care.

The nurse's activities were classified into 11 categories by intentions. The development of these intentions was as follows.

- 1) Understand the client's situations by knowing the facts and present conditions.
- 2) Make the client's thoughts, wishes or mind clear.
- 3) Encourage clients to make sure their wishes or mind in future to support them. And if necessary, encourage the clients to work on formal or informal resources by themselves for better situations.

In this process, the nurse taught medical knowledge, gave information and told nurse's judgment/or thought to clients. The intentions of those activities were to have client judge/or act adequately and to facilitate the client to utilize formal or informal support effectively.

It was suggested that the process of home health nursing was to support clients in making decisions about their daily life and arranging it or solving problems by themselves.

Home health nursing Process Nurse's intention